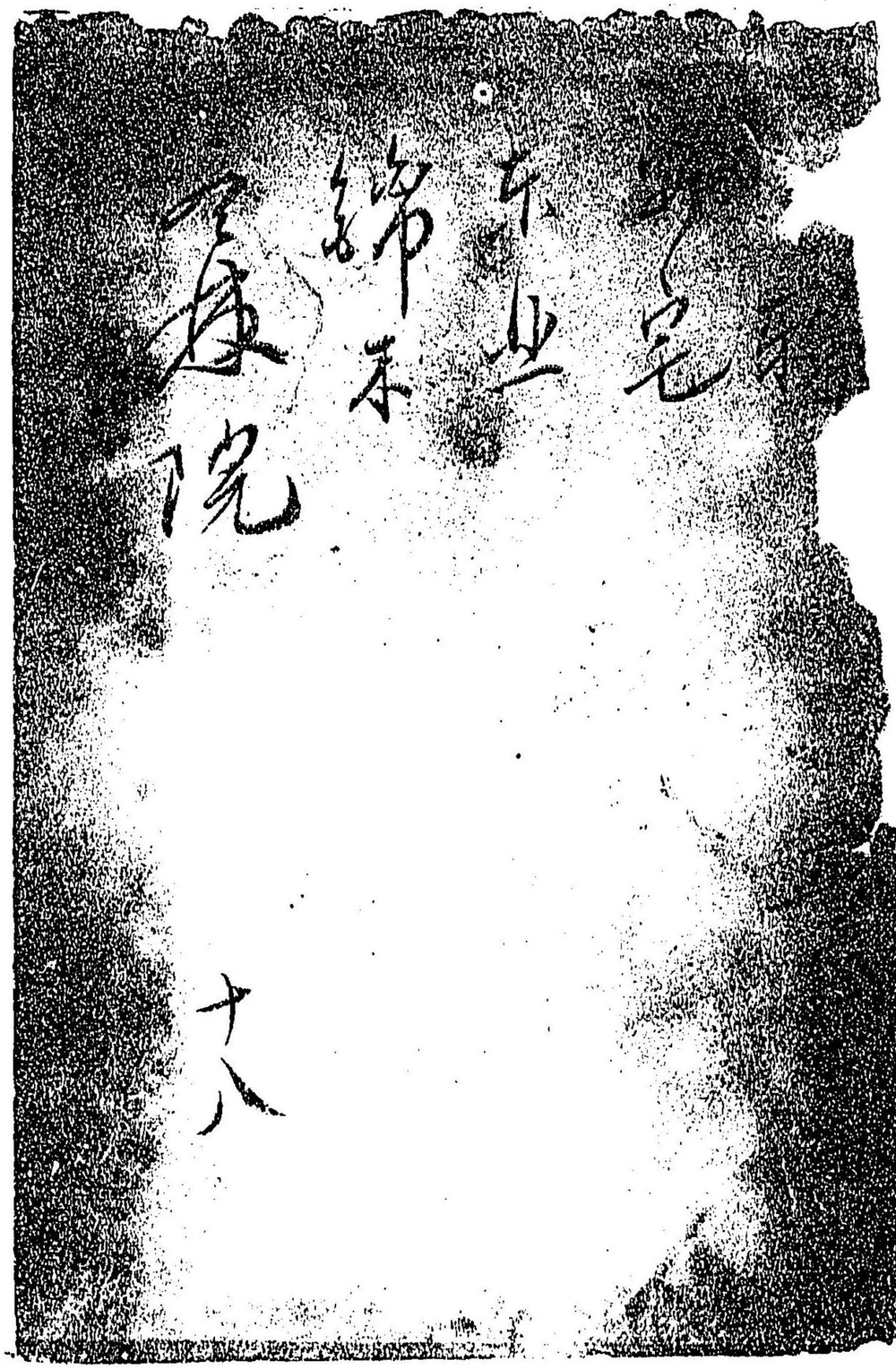
謠曲

十八

一輪
安宅
東北
錦木
雲林院

183
22
167

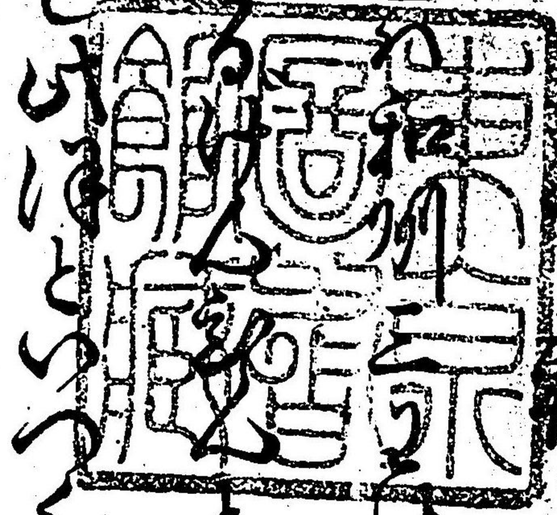


[illegible]完
[illegible]业
錦禾
[illegible]院

十八

三輪

和泉



おきの和州三ツ山のけふきの
みさるけん[illegible]と中沙門にてハ
杖をいはといつくともなく女性
一人毎日志さみありの水を汲て
来りけ今日もきうりうくぴうなる

東京都立[illegible]

老そと名を易るやとかりひは
和 三輪の山りとなるもなしくひ
ならぬ乃奥と易ん 実や老かふ
なやうとくぶの中くに身れのこり
いくさ去あきとか送りかんあさほし
やおほるなくていさはこにうくさ

とし月を三つの里にぞ波かする
女にてはぞ又此山かけにかんひん俗
頼とて尝れ人乃四人々頼にいつも
志さみあるの水を汲て来るせは
ぐふも又来るなやと思ひは 山とう
にはよる弧輪の月といへれどうこう

おりからも一むらの雲をともなひ山田
もる僧都の身こそかなしけれ秋
はてぬれば問人もなし　いつれ此庵
しづかなる東岡中ゆゑ　東岡中さ
んさい庵を尋まゐる人の　山家も
ひかり入るを世なる出るを　月光地に

志おそらく其又出て　てらす光坐
こゝろへゆしで老生と静なる山居
しづかのあくとをおしひらきかくし
もゝ河孫ぎり志気ざく花ととく人け
てらひら人　秋さびし窓の月
松の風うちしぐれ木の葉かきしく

がさけれ「とく」に「夫」よかり　早上言　「叶」さう庵
と立出て「ウ」く「ぐ」れ程なく三つの里ぢ
「れ」あたり「加」山信の「ウ」松れ志ましもなり
かかり「下」松むら「斗」ところなる「神」かされ「何」
くなるらん「下」く　ふしれやな是ぬ
松の二すとをれれぞつる女人に与へ

つる夜のかたりたるそや「灯」寄てゐれれ
夜のほまに合ひれりしまれれり後て
これ寄也「三」乃ひれ清くきよれて唐
夜ぐるとぬるぬれとぬり　「孫女」　「外」「一」「一」振
神も鄭のみ面へに人のちうに遥ぬを
れしき　早上言　「ふ」しれやな是なる松の末

俗よりたへなる所ありの雲をさせるふを
やぼかりしれ来せ乃扇生の孫かひと加
なへ所姿を由こへたりしませと。会釈
ふかれかんるいふ。墨の衣をぬらすそや
女 たりしなから我さらこ。上人にまこへ
中七。飛をたすけてこひかへ 早 ゆれ

とかれ人間にまこ。これなる神名れ
女 扇生さいとのそうへんなるを 早 出りし後
よひの 女 人名や 上言 女することこそれ
神くぢれやかけかひ引入て。唯そう
ハル 里子かゝるすなるぞ。名ほしかり 夜 ヤヲ かれ
その上にかけ所新あらたにこへたりに

かくしくれの所なるや　それ神（クル）よの昔
相続は末代の君主は為さいとなりへん
のなわさ恐くのつて世乃ため也　申（サレ）
ふも此志き侍れ人うやまつて神かまた
又ちよくのちりに備しかりしたらしく
ろはあし引のやまとは虫に年久しき

ふう姉の若さやちよとこめし虫様
がうぬ色を粉なるに（クモ）され世此人よ
るはくれ世ひるこへとぞ枕のむ川と
に所有いかのるゆへよりかく年月を
送る身のぴるとは何とうは虫はよるから
てかよひかうぬはいとふしん変きる也

ぐ同しくはとこしなへに髪をこむやと
と有しかは彼人こゝへいふ毎う実も安
はなるしれりまそよそにやしられなん
今より後は毎ふまし髪もこよひ斗
かりと稱んこ語に語ハさすり別是のうな
しきに偶る西と志らんとてとこまれに

針をつけりすそに髪をとち付て語を
ひうへく志るひ行まるこ志御の系な
かくむすふやもやあれどのうかに行く
かにの系くりやし行語に此山本の神
頃や杉の下枝にとまりたりこれそも面
さ返しや髪し人の姿あうち系の二うけ

「渉りしより二輪乃志るし此ゆゑし世を
「御ふ付て取りしやウ 上口三十地 実を経ゆ有り
愛に付ても法乃尾かとしも軽む心か
女 とても神代の相違ぞ。くるしくいさや那し
彼上人を慰めん 地 先ハ岩戸のさ袖め
かくれし神を出さんとて。八百萬此神

拝ひ是を神楽の始なる 女上 子楽なる
上口 天乃岩戸を引立て 地 神ハ始なく入
なへ。ことやさ此枝と。果成ぬ 女 やとよ
ろ川の神達。岩戸のまへにて是をなけ
ば神楽をそうして舞なへ 上地 天照大神
是時ふいることを少し覗なへ 上 又ことやさ

の雲ちれて日月光りかくやけれ人のかも
て志ろくとこゝ有る 面白やと神の所と
名れ妙なる始の物語 忘れいせさ三
輪の神ゆく一神分身の所ゆ今更何
と光会や宮の戸のよも明かくを
経き変れ告げむるや名称なんく

右之本者観世太夫章句真本令版行畢

正徳六丙申歳弥生

示来荏苒数十年ノ星霜ヲ経ルニ従ヒ改正増補ヲ加ヘ
シモ印刷ニ附セサレハ之ヲ世ニ公ニスル能ハサルヲ悲ミ今般
宮内省 御用達観世清孝ノ校合ヲ以テ茲ニ之ヲ上梓スト云

明治十三年三月三十日出板御届
同 年五月 刻成発兌

定價貳錢

出版人 京都府平民 檜常介
上京第三十組二条通弄町西入
丁子屋町三十五番地

安色

それに函くに新宮を立てに山紋
をかくて撰ゝ中ゝとの所ゆに
ては吉野山所をとれ某所川ゝ
山紋をとらめ中ゝは今日もかくて
中付ゝやと存ゝはいかに誰かを
△所前に作 ワキ 今日を山紋の所を

生ゝかゝれ志ゝ所ゝへ中ゝはへ △長ゝは
弟山紋 ▽撰の夜ゝはさてかけれ 八九 ▽撰のこ落も
ゝすてかけれ 八九 下 家分れ神や志ゝ
ゝかゝん サシ からもんたてやふ是都
の和れたひ夜日をとるくの
執路のとゝ思ゝ 下 ゝ日やる社ゝる 八九 下

かゝる 判官殿の人々は
伊勢乃三郎駿河の次郎片岡
増尾ひたち坊 弁慶は先
達の姿となりて 主従以上十
二人いまだならはぬ旅すがた
乃すゝけ露霜をかさねて

ていづくとも限りもいさや白
雲の越路の末かけて
時しもころは二月のきさ
らぎの十日の夜月乃都を立
出て是やこの行も帰るも
わかれては知もしらぬも

おぶ坂乃山うゝ霧をたるれ
うゝめしれくゝ 海路なる
かに行ふのぐゝ 海津の浦
に恋しくり 業重なやく明り
れ浦芽をつく 何ら桃山 乱
けの海家居久しれ神かれや

松のきれめ山 松田く先にみて
とるれ 桃山人乃いたり 川也
乃水のあさうつや 志ハ二重
のこれとなる 何れ志の東波
よせて 松ひく嵐のたけしれ
花のなさうに 恋にくりくゝ

シテ「御急候ほどに是ハはや安宅の
湊に御着にて候暫く此所に
御休ミあらふずるにて候
判官「いかに弁慶　シテ「御前に候　判「唯今
旅人の申てありつるを聞
てあるか　シテ「いや何共承ず候

判「安宅の湊に新関を立て山ぶ
しをかたく撰ミ申とこそ申つれ　シテ「言
語道断の御事にて候さて
ハ御下向を存じて立たる関とこそ
存じ候是ハゆゆしき御大事にてこそ
候へ先此傍にて暫く御談合ある

らふするふは。是は一大事の所
事にて冥皆々心中の事りと
所いひん所中あらふまとるふては
禁(江山)ひん中まは何程のまのはへ
き。唯折中ふ所々所事りあれり
しと存は 誓(シテ)く。作のまとく

此冥一石うち破く所事りあら
ふまるは安さるまふてはへ其所
はいんまるは来り所大事ふては
只何ともして無あれ義り然る
へからふまると存は 判(剋) ともかくも
弁事とうしひはへ 最(シテ)とは。業

きつと乗し出しこゝろすのは戦
らを始めて皆くにつくい山伏に
ていふ。何とかしてと此姿かくれ此
庄なくは事。此まくにていくと
そんしは。忍多きやすにて此へ共
此すゝうけとのけられ。あの強力

かれひこる箇とそと此かくに
かくれ。此笠を深くと召れ。いうにも
くてふまゝる此群にく。禁より
跡に引さうつゝ此毎りこそ。中
中人はおひもよりやまりしきと
在は 判 実是はむにて。はくれ

まくうけとれゆへ　シテ　長てはいうに
強力　和尚　所ゆへは　シテ　笛をもちて
来りゆへ　和尚　長ては　シテ　汝う笛を所
肩に垂るゝるすれ。かんほう実加
もおきるすれてれかれう。先汝れ
されへ田さ実れ　拓神をうんて

謀に山伏を思うむう。又右拓に
もおきう会はにみて来りゆへ
シテ　かくはれ所立あらふまうふては　上　実
やくまおひは冨生ふう思ても加
くれなし　山伯　強力すれよも目とう
けしと所すくうけをぬきかへて

麻の衣を四方に波とひ　河の
強力ゟ負ける笛を　羊羹を
肩にうけ　笛の上にあまた度
取れ取れて　おやとけ置て
都をかくし　おんかう杖にも
かり　足いたけなる強力にて

よろくとしてあ四ゝ方に
ゑ拓を痛いしき　秋しより
何とに引さらしく四出あるに
するにてはばらは皆く四毎り之
取りは　いうれ中は山伏達此大
勢四毎りは　何と山伏の四毎

十二人の作り山伏となつて、明
日向の住を安へ出る。由にて新
実を立て、山伏とかくて名をて
中せとの所ゆゑにて去る此所
とは某所つて山伏ととめ申れ
雖ふ是は大勢所在る。一人も通し

中間しれ　シテ 委細所にそれは
作り山伏と社とめよと仰出さ
まれひつゝめよも俳の山伏とと
めよとは作られはまし△ 扨 いや
きのふも山伏と三人とまつた
る上は▽ シテ 扨きこそつる山伏は判

皮殿ハ　ワキ 急むつしや同じ合ふ〻
金益一人をおしやましひ上
れは　シテ 扨ハ我ゝとも見えて猟せ
られらんするな　ワキ 中ゝの事
シテ 言ふ所がゝる不祥なる所く
殊かくつくは扨れば比上の力およ

わねるはゆうハ無期の勤めとそ
しめて志んしめうに猟せられう
するにては猛くも後りはく
ありけ　シテツレ いそくきうこの勤めを
たらめん美山に住といふて俊の
うたひそくけもきとうけ　ツレ 誰

れふとう的王れそんようをかた
とり シテ とれんといけるあらの
ほうくれんぬり 月山 十二おんえん
のひとをとへて戴さ シテ 九忌ま
んされられ乃すゝけ 月山 たい
さうこくしれのくきをとき

シテ 扨まさやつめのわらんはゝ
月山 八葉れ蓮華をふまへたり
シテ 出入いさふあらんの二字をゆ
ぬく 月山 即心そく仏の山ふしを
シテ 寞ふくうちとめかゝん半
月山 明王の照らんちりかたふ シテ 熊

社の面の中より往来のまゝも
の一巻を出し。勅を拙と名付
つゝだからかにすそこゝ上げ是
それ法ゝく月なりんこれは大悪
なり志田社の月は祢ゝんの
雲にかゝる志ゆりし長柄ゝん

長柄夢かと行かれへき人もなし
爰に中法門にたらし法と此名
とは聖武くらうたいと名付事
里さいあはれぶにんにかりけ是
んかやこうくしたいきう眼にあ
らくなんこ也とつらぬくぶひと

ぜむろにひらうへして惜しやか
仏を建立せが程の悪場代ぶ
へなんすを出しこそ後悪場て
うんぶ法国を勧進せ一志なん
せんのがうさい乃業は此世にて
はむひの業にあらり遠来にて

はぜせん蓮花の上にさせん酒令
公い志国上教国と天をぴくけとよ
ミ上たり 冥れ人ぐ行を以し
おそれをなして爭しなりく
急て所をりはく 此事は いふ
うふ中上は判官殿の所をりる

ワキ いうに是なる強力と夜迷とてそ
日山 とは秋君をあやしむらは一段
の浮沈きはまりぬと（イロ）皆一同に
立寄る シテ有 あく聲ぐあはてゝるを
志そんとれやあ何とて何の強
力は無らぬぞ ワキ あれはこなたよ

りとめては シテ それは何とて所と
めはぞ ワキ あれ強力加ちと人に
所らるとゆ者のは程にさて留
てはよ シテ 何と人か人に所らると
はめつしからぬ御にそれ扱誰
に似てはぞ ワキ 判官殿に所らる

と中若のは行ふ落居の男と
めては　シテ　やぞ行ふ所、判官殿
ふ所中たる強力めは一行の忠
ひ出れば後立や日高くは能登
国とはさうすると忠ひつるは
がつかの面おふく論まされ

ま社人もおやしむまざりして
此行ふつくりくと忠ひつるは
いく掴ませてくれんとて今から
杖を追とつくさんくはちやう
ちやくは笹まことにおぐや面は
目をかけうふは盗人はう那

かくれなきかげが花や
しろ強がはだらかかぬきふ
いかゝれ雲のふるまひへ花病の
ありかと十八の山伏はらうと
あ桜うけてばさみかまる指
はばうめ天ま路神もぜつへう

そみなる道ころ猿りくは
ぢやらく各りゆへ三の
冥土や極楽の花名こと
てれ富が不妙く此体とあふ
さうゆく程く七よ此余りく
ばかり中上は相と只今の縁りよ

こゝろ、さんぐ、おうつて我を投
ゝる。是無愛かたりとふ非ば
八幡の（下同）所ゝ見んかとやへ、ゝ和
なくそ是四る（クリ地）それ世ハ末世（元）ゝ
およふといへとも。日月ハいまた地
ハ落かゝらぬだとひいかゝる方役

なり世。（元）ゝ海ゝしたゝ君を打杖
の天罰ハ（二月下）あらぬ（二月下）ゝやゝ（二月下）きゝ
実（サ三判）や現在乃果をみてゝ玄末
來を志ると云ふ（同）今ハ志られて
身の上ハ（下同）うれ（中）年月（元）の二月（下）や下
れ十日乃公ふの雜と遁まつる

社ふしたなきまゝ唯けなるうに
大命人夢乃さめたるゝ心地して
だうひに面と合つゝなく斗なる
ぞ拾うゐ拾らに兼程ぞうゝ
爲此家に生れ来て命と称
に生りがたらしと雨海の波に志

川めざんやかいんに拾さ伏あり
江武士の燈の独まくらかたしく
傍も波の上ゝ時は舟にうかひ
風波に身をまゝりせんとは山
脊のゝ雪といふ夕ゝ風雪此中に
海おしきゝ夕波乃立くる春や

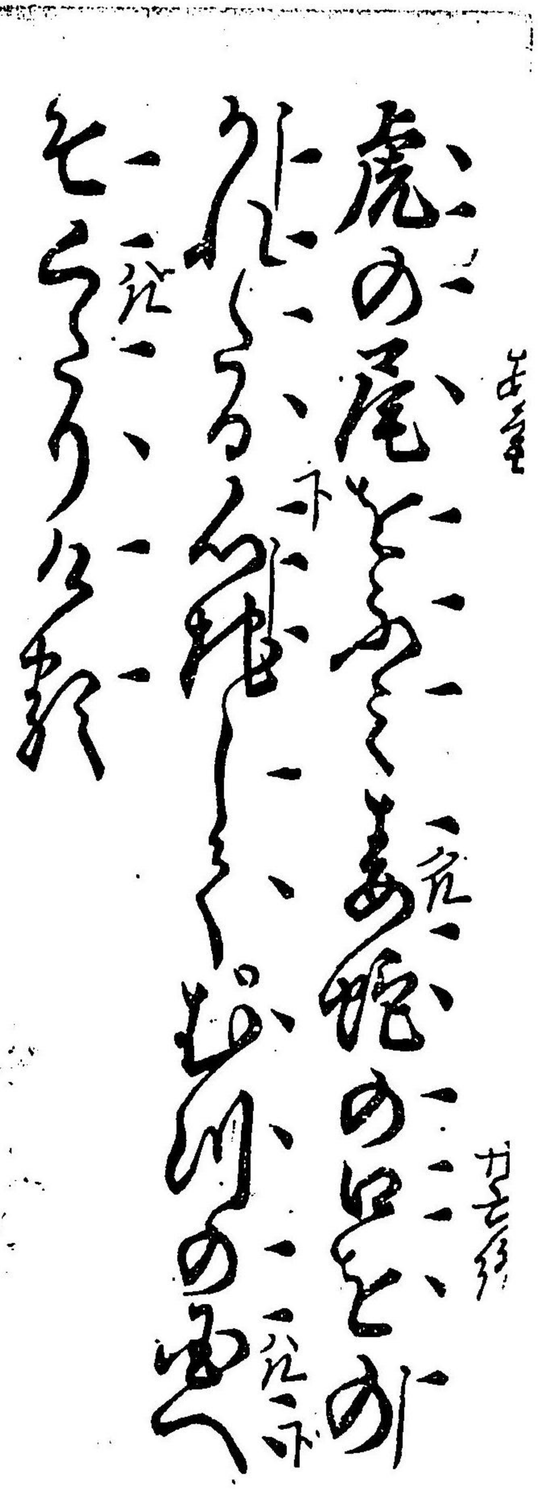
さ雨ありしれどかく三と日の程
も和く。歌を得ろかしなひく世
乃ぞ忠勤も徒ふ。如果る此身
のそを何といへる風果そや
上聞
実やさかるが叶ふれば社うさ
世なれど志れ世けとろ当ぶひ

うへ日をなつを田を此ずなる
人は若しこそ澄泉はいやほし
ふ世にありて遠を東南北雲
をとし西北の田にしりふ日あ
られ埋るうきなをどこをりた
りふへきなるふたら世れば神も

シテ ムヽ、まさなうや、娵か娵かそれ
ヤア 娵ら無やあゝ娵か、それらちよ
や、いうた従うある 所あるは
ワキ 根も山も違を参らせて後
に面目もなくは後に追付申
酒を一つ参らせてあるそ
汝は先へ行てとあかし申へ 最て
はいふに申は先へ参らせて
後に面目もなくはとて[illegible]
是と酒をのみ合せて参れては
シテ [illegible]のちやうて所が熱
らふさうみてはつ シテ 寒くてならぬ

ふしきり人の情の盃をうけて
心をとらんとや思ふつきくも
猶く人に人かくれそくまとなり
竹の中めらうつかんくしき夜に
いさあらはいて此山かけのかのひとや
とりふばかりもゑ居して前も

山路の菊の酒とのまふよ面
白雪や山水のふくしさかつき残
うへてハ流ふひうて世水彩
はまつかへきる袖ふれていさ
や弥をとまうよりとより矣
寿れご塔の四う偏まひ延年



右之本者観世太夫章句真本今版行畢

正徳六丙申歳弥生

示来荏苒数十年ノ星霜ヲ経ルニ従ヒ改正増補ヲ加ヘシモ印刷ニ附セサレハ之ヲ世ニ公ニスル能ハサルヲ悲ミ今般宮内省　御用達観世清孝ノ校合ヲ以テ茲ニ之ヲ上梓スト云

明治十三年三月三十日出板御届　定價貳錢

同　年五月　刻成発兌

出版人　京都府平民　檜常介

上京第三十組二条通寺町西へ入丁子屋町三十五番地

虎の尾を[illegible]

出版人　京都府平民　會常介

同　年　正月　[illegible]

明治十三年三月三十日出版御届

宮内省　御用達贈世清芸ノ故合ヲ以テ茲ニ之ヲ上梓スト云ヘ[illegible]

[illegible]

五橋六内申歳弥生

古之本者贈世太夫章句真本今改行畢

軒端梅

第一　年たらうへる妻なれや。くるゝ乃

ミやさにいそかん　「見ハ東西うこ

より出る僧ありけり。我いまゝ都を

見せば程に。こ乃妻思ひたらみ屋こ

に上りけり　妻ハ[illegible]やかまとこの笑我

[illegible]

なさこへて。ウ〳〵。そてのありけるを武藏
野をゞけくらしつゝあとをさ。ウ山まさ
山の雲をへて。ト 殆の宮をちらつく風。
接まてのとけうるゝん〳〵 ワ羊羽 意は
祇ふ。こやあふ義ては。又是なる梅を
見ゆへは。今をさりとうえてはいり祇

名のなれるはまし。此あたりの人
ふ義をやと思ひは シカく ワキ 扨は此處は和
泉或殆とゆはそや。志ちらくなるの
免をやと思ひは シテ女羽 なふ〳〵あまを
なる所僧。その梅を人ふ所ろ祢
くは。何とをしへ来らせしはそ

鴬乃梅ふかく　ワキ詞「枝ハいつくそ武アの
うへおかれし乃ちの梅そさひけり
そや又あの方丈ハ和泉式部の所
住所にて候　女「中ゝ乃るすハ則ゝ
志きふのふしとありしとはくさ
そうへをも縁りそて今ふふ人せぬある

うわそうし　ワキ詞 和「ふしきや枝ハ古への名
とのこしをくかこさて　レテ「花もある
しを志らふうと年もとらもいやまし
み　ワキ「さとみやひとあかれしき　レテ「梅
を着と　ワキ「ゆふうと　上音「春月とふかき
新鴬の梅の花にく（ウ）おかしと志れハ

久かたれ。あまたる雪乃なくてしらふ。雪
へうる名残りや。いろこ或説のもなこ
ころ 実やいふしへと。雪ふつけて
もしひ出れ。春やむかしの春ならぬ
ちりぬひとりそんなれ 猶雪いと
白雪のふるゆをぞ。ぞにとれまし花

志れ。鶯のうふかれ。雪此花に
すむかのを 花 そもしれ花にもむそを
はとふさにちるる花なるの 女 あなし
こちにとうへるさ花 花 されしろ絵り
花のうけふ やさしふとこえし波
まふ。我社むめのあるしうと夕く

しなおのゝ花のうきふしかくれてかく
きりにかくれてけふかふかり
桜もとから杉梢の梅のかけふかそ
ぐしなも絵かゝ法の名ままよる月
の桜さくのふ此御経と讃嘆するく
あふるかく乃御経やおなからなかれ

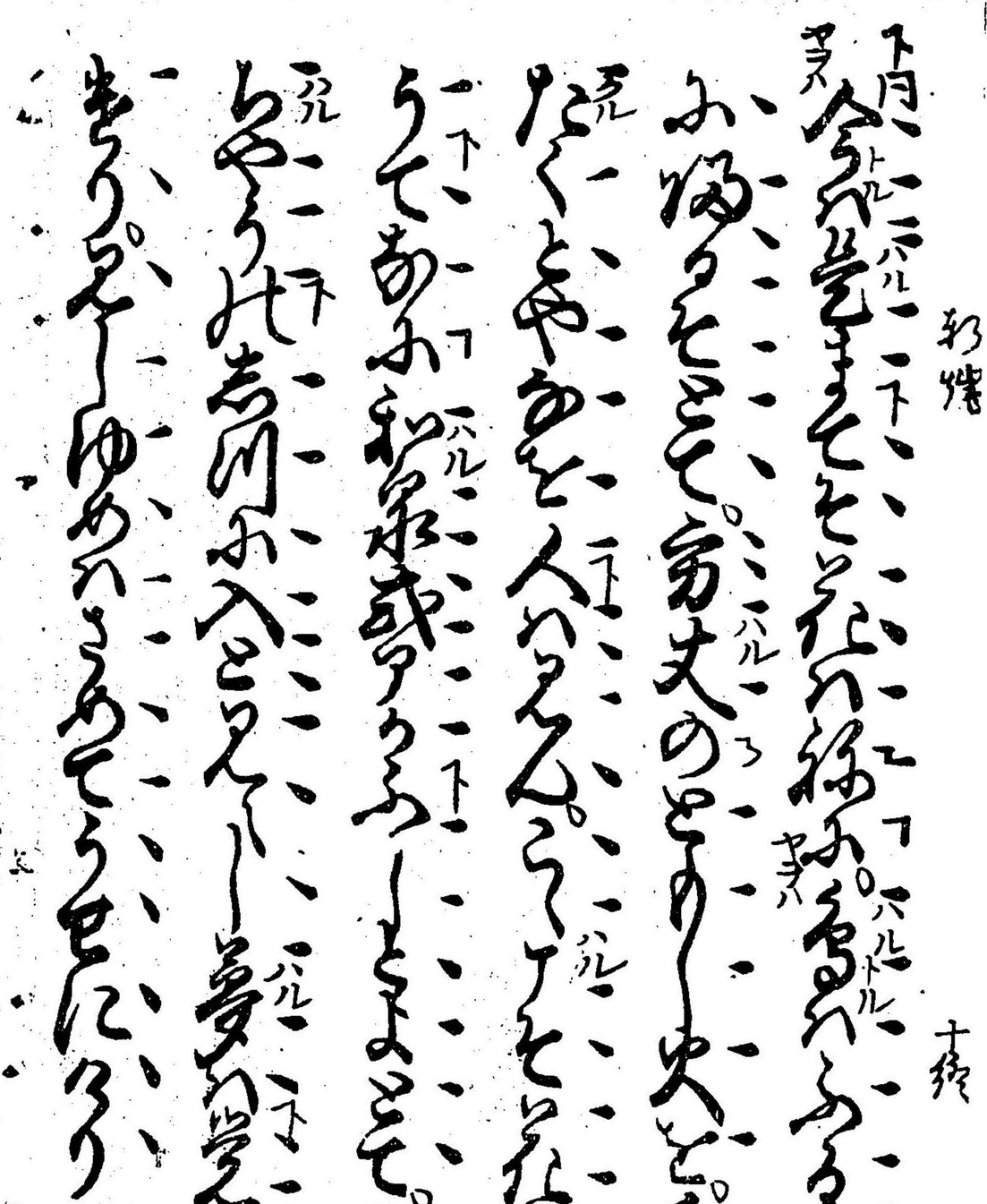
御経やあなたく宮も寄しかふ宮ひ
田かんよおん名ひ出てりぬんふ乃名を
桜此ちらまと上東門院の御時御堂
の室白此めん名をと名りかひしう
御車のうらうまて樺をきやうの由
ほんとたからふまゝうひしもど武ア

此門のうちにてきく。かどのかゝ法の
車はおとさけれ。我をくれたるを出る
けるかなどかやうにしてしまう今のを
りかゝ出ひ出まことにそや 実に此
ぞれ和泉武夕の思いうそとぞんしやと
も笑およひし也。扨は思いかれんのこ

やくくれたをはんや出すへまや
中くはすくれたるは出ぬ去なから
ぶみをくりのかきうとあて 猶おの
あふさむ月乃 出るれくれて 今そ
きてふ 三寄むあんのうちをとり
ぐみ川の車ふ法のなきやくれて

わうじやうのきもんをまもりつゝ
あくまをはらふ雲水のみな上は
ゐけのかも川や末白川の波風
もずとえまきひきのきやうらくの家
となりすとうやまちすつとたく
はゞ鳥は宿す池中の木僧はたゝく

月下の門出いるじんせき数々の袖を
はらねりすそをとをつらねて袂をわく名所
かけふかく花の都なりけんふ川
もんはのまつく吉見んさやくけちる
かいやはしふ日枚てうはふかおもしろく
きらくこらくのなかりけて秋さり



右之本者観世太夫章句真本令版行畢

正徳六丙申歳弥生

示来荏苒数十年ノ星霜ヲ経ルニ従ヒ改正増補ヲ加ヘシモ印刷ニ附セサレハ之ヲ世ニ公ニスル能ハサルヲ悲ミ今般宮内省　御用達観世清孝ノ校合ヲ以テ茲ニ之ヲ上梓スト云

明治十三年三月三十日出板御届
同　年五月　刻成発兌
京都府平民
出版人　檜常介
上京第三十組二条通寺町西入丁子屋町三十五番地

定價貳錢

出成人　會常介

京都府平民

同　平五民　[illegible]

閏[illegible]十三年三月三十日出成御品

宮内省御用達贈世青葉人故合ヲ以テ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

古之本者贈世大夫章句真本今成行畢

錦木

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一見の僧ともは我いまさ東国

をうんとは行ふ此度ぬひとら

みちのくろとてまてを志留き

ゆうせんやとさ
ぶひけ（ウヤ）いけくふ
を（ヲ）ふとめしと
四く雲れ（ウ）ぐ
ぐさてをゑゑ
夕暮れそら
もかさねるこひ（ニ）夜（ウ）かくさそな
しろみちのくれ（ウ）ふの里まもつ
きふりく（コヒ）
第二人
ふの細布

織（ト）をりのぐ（ハ）ふしれ（ト）本や名と
くねるん（ニ）
みちのくれ思ふ
もちをりくれ四へふ（ハ）みくまを
めふし我うしと（ニ）りふとむ宮の
青まなれくいけまて第れいつ
かさてさひをかさん夜手れがり

かゝる物にて候　是ハ細布
とてはたばりせばき布なり
是ハ錦木とて色どりかざれる
木なり、いづれも当所の名
物なりこれをめされ候へ実
にや錦木細布の事うけ給
り及ひたる名物なり扨ハ
思への名物にて候らん
その錦木やなにふかき錦木にて
布れハさひもなくまでそれ
哀もおよばぬ世のかねるに
いやいやそれも所猶々

ふえんなれるをとれ何とてしろ
しめさるへき。二人上 ゆえんなれは世を
捨人の。まんかれこちのことを
む。此 ニハ 孫木や ヲト 細布。しろしめ
さぬは理りなり ワキセル あら面白の
ゆえんこそやな。扨く孫木細布

とは。意得ぬこりくるいたれよな
ふ シテ 中々のなすことせまてこ
とをく数乃孫木を。日をとり
こそくちつゝとも。こゝみ 女セル 又細
布はたゝはり。せはくて。さなから
ら身をとゝかくさ。ト ひれむ ハ あひ

六

うたれ意なくなりて（シテ）引らふふ
もらせ（女）名をもしそく（シテ）あれ
ぬをとゝと（女）よむ雲の（上雲月）鏡木
ハたくなりて持ふれ（ワウ）く
ぶふの細布（トル）（ヤア）ぬ（ヌル）あれしとやと
さしもしらみし細布の（ヤア）ぬ（ト）と

いりを船さ身にて雲相うり
船うしやヤラハ実（トハル）や名のくれいなし
語のまつのこと（ハル）れ（フト）れをとき夕日
のうけを（ト）鏡木（ニ）乃風（ハル）とりふいさ
やなしん（ト）く（三）（早付）拙く鏡木細
布のいとまを明相鏡ゆへ（シテ付）昔よ

又此石のなかへひきて男女此孫
これ此孫本をつくるゝ女の家乃
門に立るしるしの木なれば
つくしく立とりかたりて是を
孫本といふ。さる程にあふへ此男
此孫本をいとり入おふまし此

とれ此入孫はおるひはりしよ三
とせまてをだてしにふるてち
川かゝもゝめり。又此山うけにに
しき塚とてはゞ是こそ二とせま
て孫本立たりし人のこゝろん
なれば此をく孫本乃救せに

はなかつきこめてたきを猿つると
ゆみ　きこれを猿つるとみて
たゞの柳ちゝりなしやうしろゆく
へこうりゆくへ　あかいてくさ
られをしへゆきん　是ぬき入
かいせうへとてふるぬの名れせぬ

いかゝかるこひ人をとこそ思ひつ
ねこの綱をはしとけて帰縁
かゝるそでの袖のふ名なうるあらの名
たしも人のうちひらくさへも
どこへやみあれの窓をとも
しれふとまし赤んみよのこと

はいろくそやもとめてこそか
かゆる秋さむけなる夕なるく
き嵐こうしむら時夜寒を
けうゆく足蛍の山のとうけ
をものさひやうけいふなくぶく
ろうらんさくれむようるか

るさつゆとむなるつかの菓もみ
ちもそめく錦つかれ見そと云
捨て佐かの月まそ入よるふう
ぬれ佐かふ入よりとしり
れ佐のくつかのまもゆく徐ら
まん物う秋風乃松の志ても

十

よもすがら読みしぞやか
しぬるかく
ツレ女上 いかに御僧一
書面一つのあはれをとくむも縁生
此縁をとぢく猶とぶらひてや
ちぎられしあまりてそがくやさり
ある草の枕の夢ばかりなし

おほかたよおもふ川よの御弔か
ありがたかれ御弔ひやな二世と
う縁るの契りをふかきしを
三とせ日数つもる此縁の
ねひうえ法のちられる経
まよひぞし　あとをとゞめぬらん

羽衣

今こそ知らるれふしぎなれん楽衣の
三と世をぬ天への夢まさ
由めふぐよひ三とせ乃ららうふ
今そ衛なれとおとれうも
とのふひ草れがけりこゝそさ
る佐の幻ふあられ出る線

心残せよいふなうく結うく
れそとふ入ねまへぜうるも壽
ことかぐらさりくりくあら紅
うやふしやれさと衣縁
とみそつるか門ゆうやく蝶のか
けあれうかる寺んうの門ふで

と物をこそ鍋木をつこそ昔を
聞ならはしを用ひしかり是は愛らや
現らや　女　かさくらの山のやこに
まとひに現愛現とはよひとも
なめよ　シテ　美やむらしに業平
色世ひと定ようといひし物を愛

現とはこひ人ナモ能く志つし
めさるへはれ　早ヤ　よし愛なりとも
うつくなり哉ちやく昔をあら
ちしてこまを加ら我に世うへ
シテ　ツヨ　色　いてく昔を聞さんとタかけく
さ時月のうに　女ヤ　女は塚の内に

ぬのをりてもさらさらん実やさら
のくれなゐの錦ぬひとそでかへす
おかるわさは世ふ錦てさる錦
帷中つるなふたてかまおかふ稼を
昔と錦との唐錦の谷ふ谷ひ
てどる細布や錦木はしげふきひ

かれよをとふるとてもとは此稀んかよ
もつさし　錦も今あひかさ
錦ふよりて妙なる一条あつて
んのくりをとえんとさんけの縁
髪中ふ稼を錦ふも稼りあつ
さる錦木ととえへ女ハ同ふ

細布のぞこをとる雲に袖にかけて
てとゝふとゝて袖をしぼりあるに雲ヤ出る月
外にみえそとれば恋しき思ひ
中かきの菓は戸さしけるに
ふくヤよれはとゝふの明かれはまた
くと立ヤ待りぬヤさる程に思ひ

の数もつもりぬヤて孫末はまく
ちてさぬるに昔に埋木の人ヤ
志まぬ身ならんれかくしぬひも
とまるへきにヤ孫末はくちはもも
名は立てひてヤ逢半は涙をも
ふ虫ルなるやヤ忘乃そめ末雲は

徐末をよみしなり 上シテ ヤヲハ 忍ひ給や
ぎらのちしかさうれつめて 同 りし
まもかなしまゝ給ひ已んとよ ヤア
みしこゝにあるものを ヤヲ 已めく
は一と已まれのこゝろ 二と已あ
まりなりありてちやこゝろ也

くれ ハふとも 上ハ 已 ヤヲハ くれおひ 下 也
徐末ハ 下 ふ度ニおきゝ 二 ニ 流ニ ヤヲハ 我
も 上ハ 門ニ 急ニ 下 立とり 徐末 ハ 已 ヤヲハ とりに
ゝらぬへき 下 そ 上ハ そのねこゝ 上ハ 已
後 下 さうにもなしや 上ハ 見えうらぬ
そ 上ハ 扨 下 いれうこと 已 ハ みらぬおら

十七

つまがはまなや　絲本と
ちつふめぬ今ごろ　人ふ
おかきらきぬ縁やのらつぬ　嬉
しやがごよひあふむのさつ川さ
み田をとめらへ絲の袖ほ
く　絲とまひしうと

どうふかいつ色比かうちとる
い御本　とかがそぬの
とりし泉しの枝枝の
さかつきふうりしろ月のう
けろうや　おさまふや
なり冬んさめぬさ比てそ田あ

人なるはざめかれ 弥末も細
布もゆめもやふまくしらう
ふうさうくしらるおしさのも
ら此布れつりとしめふる

右之本者観世太夫章句真本令版行畢

正徳六丙申歳弥生

示来荏苒数十年ノ星霜ヲ経ルニ従ヒ改正増補ヲ加ヘシモ印刷ニ附セサレハ之ヲ世ニ公ニスル能ハサルヲ悲ミ今般宮内省　御用達観世清孝ノ校合ヲ以テ茲ニ之ヲ上梓スト云

明治十三年三月三十日出板御届
同　年五月　刻成発兌

定價貳錢

出版人　京都府平民　檜常介
上京第三十組二条通寺町西入
丁子屋町三十五番地

[illegible]

出成入

會常合

京藩[illegible]平見

同　年五月　[illegible]

[illegible]

宮内省[illegible]

[illegible]

示来[illegible]

五[illegible]六丙申歳[illegible]

[illegible]本書[illegible]太夫章[illegible]真本今[illegible]畢

雲林院

深草の松もむらさきのぐ雲乃

たゑしをなん　呈行

「昆の津のくに

芦屋の里にさんとうと申者とて

ゆ我いとけなりし時よりも伊

勢物語をよみならひ

[illegible]

ふしれなる夏草を篆りて山程
に呂今都に上ちてやと存れ
花のあらたに知らくる日を毎う
うるかなり鳥れ老く帰る時
ぞくほくもまる春れ夜乃月の
都に急くなり ウ あし屋の里と

立出て我は東に趣けば名所乃
月れ西乃海堤のひるおれ浦と
をしく ウヤ 松ケけにぶりを加
川くなまう濤ウ 鶯てゑへる
いさり火乃あらりをとへは難波
津に鳴ウ やまあ花冬こもりぞ今は

うつゝに数多乃花をうたしかしとも
桜に匂ひしある雲れもしやしふぶ
かりく　ちるかふ人家とも
花あまたなるとかぞへ入なれども
陰に花より外をもとしれ　なをや
うかれ行ふの朝の露あきこえし

嵐のかの夕ぐれ空の雲の夜乃おもかげ
紫に添やう嵐の山の名にて
浅け緑の風のふきそめにはなとを
きた学れ桐風よ山ある松の
ひとさる人のそれもゆきぬる本れ
ゆらかいなのめとかとちらし

花や風ざれはしそ人のほゞ川花
梅籍の人をこの花給へ 平河 それ花
はこふもぬすむもしあり どこくも
ちる風さむなれしこうひそ シテ 己
そも数へさ花なれ共むふれは
あらしぞれもむりを社ちるを

だとは枝なかるゝ手をれは風より
も招うれ人よ 平 何とくそ世は
師はぞそれこや人に給ふん様む
ぞとふれて家はとふ已んとはよ
こけるを シテ 右梅にうむもなり又
有雲にぞ 下 風は花のあらりとよ

たくふけ（詞）ちろはちろやうけろ
ふとうんぐふやまれ枝の一時を
ぐ今ふうへしとは花よ世ハきゆう
月ふうけぐ顆万くるれ玉よりも
宮とおりふ此花をおらせゆるれ
作まし（ワキ）生ふしく是れ此御り

花のいたぬ色なれハ人ふく花を
こひ夜（シテ詞）けい風うきさして浴く
ちひるをうこうせは（カル）家ハゆきれ雪
花もおしきと（シテ）いひ（ツテ）作（下）し
（上ニ方）実枝とおしむれ海と去れ之先
手折ハ見ぬ人のこゝろ（ツ）情（ウ）もこふ

を情ありぶる川の辺乃あらそひ
柳揺とこれまでも超と去れかし
さなるく いうに張人の身も
何かとより来りかふを 「半汀」おまへ
津の国なし屋の里ふ公光上市
者まくれが我いとけなりし比

よりも伊勢物語とこそ事は変に
ぬる枕の夏ふどある花の陰より
も紅のちる夜めさはる女性ぞく
たいかへるかのお伊勢物語れ
さうしともちたくとこそふをお
よりにまつる扇にとへる何まとを

伊勢掴給乃招牟。在中仍業平
女性ハ二条のきさきの。所ハ都小山信。
業の雲ハ林と給ふとて夢さめ
ぬ。餘りにあらたなるゆふこゝ給
ふ。こゝまてこゝりこゝは　シテ　さてハ所ゆ
の心をえしつゝ。いせものかたりを

さ川ハ心となり。今宵ハ夜ふかし
かひ。別し夢を給給へ　「キセル」　うれしや
さらハ木ハ物ハ。独をかくしき
嫁しこゝろ心　シテ　「行」　衣をかさす
つゝ。情と称の夢を給ふ。なるとう
志りし乃なかる事さ　「キセル」　かゝ様にハ

所にはりく 月やあらぬ雲や
むかしのみなしぬ我身ひとりは
ぶやの身にして 嫗しきやかに雲
の上人にほやうにぶ花ようろひあ
らそれかふはいかに人をましまそ
今は何をうほむ色さ背男のいに

しへと絶らんとあに来りたり 男
らは夢中に伊勢相絶のこゝろなく
とかたり給へ 以てくさらは絶らん
さぞ花の何にしとしたるをへく 男 その
志なくと 絶りたり 柳は相絶
はいかなる人乃なにかはよつてかりひ

の嘉祐をそめなるをとぞいひけん半色
おとなりなるを 國川はおうさてん
の国をさのかぶ人めをふかくあひ心の
下まさんの法まくと人はたまも
は秋を花に心をそみてどりにおく
うれ立出海 二月やゆく青あれと

月はいりぬれは出る意行うか柳
日れもゆのうちに名所といふなれは
秋かほうちに行りかの遍照の法
称しぬ花のちりつりるなるた川をお
うちりぬりひ志らまを海ひ行
かつけるきぬは紅葉かさしぬ此袴

ふみ志れ繰ひ出るやまゐ男むら
されのぴとりと由ひれふらちる波志
なるくすそとかひと行く 絵漂路
やそのゑ志けるとさき色れかり夜
のたもとをうふりれこしに折り行き
志のひ出るやれさきのだそうま

月もちや入ていとかほろ枳に僧れ
去角れつるれ海かと袖うち払ひも
そとれ志なくさくとだとりく
も遅ひ行 志ひ出るり枳柱れ曲 返
ほま袖と月や志る枳柱の春ゑも
時うまれぐ名殊の月も山あひの

182
22
167

右之本者観世太夫章句真本令版行畢

正徳六丙申歳弥生

示来荏苒数十年ノ星霜ヲ経ルニ従ヒ改正増補ヲ加ヘ
シモ印刷ニ附セサレハ之ヲ世ニ公ニスル能ハサルヲ悲ミ今般
宮内省御用達観世清孝ノ校合ヲ以テ茲ニ之ヲ上梓スト云

明治十三年三月三十日出板御届
同　年五月　刻成発兌

定價貳錢

京都府平民

出版人　檜常介

上京第三十組二条通寺町西入
丁子屋町二十五番地

132
22
157

右之本者観世太夫章句真本令版行畢

正徳六丙申歳弥生

示来荏苒数十年ノ星霜ヲ経ルニ従ヒ改正増補ヲ加ヘシモ印刷ニ附セサレハ之ヲ世ニ公ニスル能ハサルヲ悲ミ今般宮内省御用達観世清孝ノ校合ヲ以テ茲ニ之ヲ上梓スト云

明治十三年三月三十日出板御届

同　年五月　刻成発兌

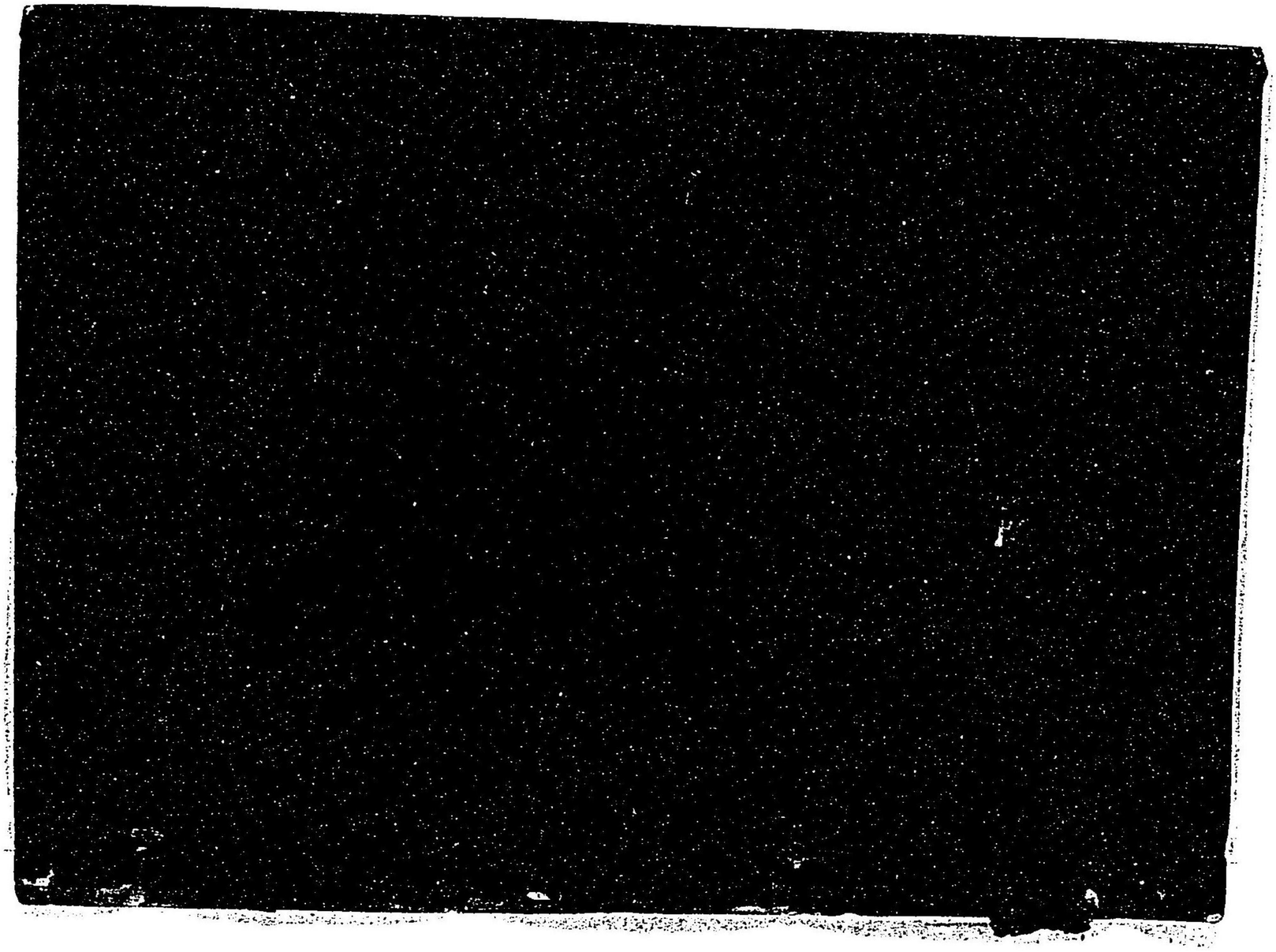
定價貳錢

京都府平民

出版人　檜常介

上京第三十組二条通寺町西入丁子屋町三十五番地

182
22
157

東京圖書館

和書門
音樂雜藝類
一八
函
五
架
一四
號
二二
冊